

—現代日本の住居における食事炊事生活の形成にあらわれた連続性と変化の実証的研究 その4

大阪工大建築 ○塩谷壽翁 日本女大家政 沖田富美子 熊本女大生活科学 亀山春

目的・内容・方法：関西地域および関東地域の現代の都市部の住居⁽¹⁾における食事炊事などがおこなわれる家族生活空間（以下、食事炊事空間）のくみたてられかたとその使われかたのしくみには、明確な地域差が存在するようである。この仮説は、1950年代の後半以降の時期に新旧の住生活の諸要素が併存されるもとですすんだ食事炊事生活の変化と住居空間の形成とのかかわりかたをとらえる既研究⁽²⁾をすすめるなかでえられたものである。本報では、実態調査⁽³⁾でえられた結果の一部をもとに、食事炊事空間のくみたてられかたにあらわれた両地域のあいだの共通性と個別性とを少数事例から実証する。

結果の要約：対象住宅の住居空間のくみたてられかたは、80年代にいたる時期に統合化される形態をしめしており、それはいちおうの社会化の過程をおえた段階にある。なかでも食事炊事などの家族生活に対応するとみられる部屋の配列のされかたには支配的な型がみとめられるが、その形態の一般化と定着のされかたは両地域でおおきく異なっている。それは、(i)関西地域では食事室兼台所を中心にした家族生活空間のくみたてられかたが典型となる型式として成立しており、食事の場と炊事の場とが一体化されているのにくらべて、関東地域では食事の場と炊事の場とを分けるくみたてられかたが対称的な型としてみだされる、(ii)洋室⁽⁴⁾化は食事炊事の間につながり家族生活に対応しているとみられる部屋ですすんでおり、とくに関東地域にこの傾向が顕著にみとめられる、ことなどである。また(iii)食事の場は行為が重層する使われかたが基調になっているが、概してみれば家族にとってオモテ向きの生活とウチ向きの生活とを分ける部屋の使われかたのしくみは両地域に共通してみとめられる。以上の両地域の共通性と個別性の意味の追求は継続しておこなう。（本報告は文部省科学研究費補助金による研究の一部である。）

注 (1) 都市部（人口集中地区）の独立建ての専用住宅。(2) 塩谷壽翁「都市部の住宅における食事炊事空間の形成にあらわれた〔近代化〕の諸相」【すまいの近代化論】（日本建築学会建築計画委員会編）、1989年、pp.100-120、など。(3) 「現代住宅の住まい方と食生活にかんする調査」を1987年に実施（内容は略す）、対象は大阪工業大学・日本女子大学の学生の家族214世帯。(4) 畳がしかれていない部屋。